

(前号より続き)

旧制高等学校の教育では、文科でも理科でも、学校教育また寮生活でも同じように、哲学、倫理など文系の考え方が中心になってくる。文系の常識とは批判的精神である。旧い常識を一度は否定し、考察し新しく完成した結果は、前と同じでも、新しく批判的精神の洗礼を受けて出来たものとして受け入れられたのであった。最近では科学技術文明を重視する余り、公害、環境破壊、地球温暖化、大量破壊兵器などの負の遺産を生んでいる。人間の生存、社会の発展、文明の継承の

会生活の基本的なことを一定程度以上学んだ後、専門分野へと進むことの必要性からであろう。

さらに当時の旧帝国大学をはじめとする国立大学、いや大学(予科を有する北海道帝国大学は予科が即ち旧制高等学校と同格の教養課程であり、四修で受験も出来た)では何れも女子の受験は認められていなかった。

女子の専門学校は女子医学専門学校、女子師範学校があったが、日本女子大学、東京女子大学も大学制度は適用されていなかった。男女差別も甚だしいと云われるかもしれない。

も一つ追加しておきたいことがある。それは現在の中高一貫教育といわれるものが、戦前から存在していた7年制高等学校といわれ、中学4年、高等学校課程3年[旧制高等学校(官立)と同じ]の学校であった。府立高等学校、東京高等学校、武蔵高等学校、成城高等学校、成蹊高等学校、富山高等学校、甲南高等学校などである。これら7年制高等学校の生徒・学生は頭脳のよい者が入学していたことを追加して本稿を終わりたい。頭のよい者が全て正しい考えを持つとは限らず、それを正しく導くための文系教育であり、教養である社会なのである。それが洗練された常識といえよう。旧制高等学校はまさに理科でも文科でも、人間的教育が背景の最も主要な部分にあり、理系が社会に対して暴走をすることのない様に人間教育をしてきたのである。そして全寮制である社会はその中心であった。理科の旧制高等学校の本棚には、文系と同じく西田幾多郎の「善の研究」や、カントの「純粹理性批判」などの書物があったことも忘れられない。哲学を理解しようとした努力の一つでもあったろう。

終わりに当時の学制を表として示しておく。

現在の教育制度の在り方を議論するつもりはな

飛び入学と落第(2)

前田記念腎研究所理事長 前田貞亮

ために知性、いや「知」とは何かを探求するのが人文科学の本質であり、今日まで文化人の心の中に受け継がれてきた。その基礎を学ぶ場、環境、雰囲気を保ち続ける文化は、最も重要な精神文化である。それを基礎に、個人の差を認め、人間、社会、文明、それらを正しく判断出来る論理、実践方法をも考えることも大切であり、悪平等、即ち優れた個人の足を引っ張ることのないように教えるべきこと、また勉学に繰り返し学ぶことの大切さと落第制度も認めるべきであろう。まさに学生のための大きな親切心なのである。

「四修」で進学出来ない学校は、実務学習が中心となる医学専門学校、高等工業学校、高等商業学校などであった。一般教養、社会公民、その他社